もっきり瞬景記

山田三陽子

もっきり

うちの店のウィスキーの陳列棚の上に恵比寿、大黒の二体の木彫りの神様が祀ってある。

恵比寿様は、商家の神様であり、もう一方の大黒様は、飲食を豊かにする神様だそうだ。

農家のおばあさんがしょい籠に入れて売りにきたものを買い求めたものである。

手拭を被った小柄なおばあさんは、

「おらんじいちゃんが彫ったもんで、これぁ栃の木だあ」

といった。買った時は、もっと白っぽい色をしていて、艶がなかったのだが、今は、飴色になっていて重みを増したようにみえる。

だが、その神様達、大分埃がたかってしまっている。ちょっと手をのばせばいいものを、気づいてはいるのだが、そのままになっている。

商品にはハタキをかけるのに、神様の方は、放ってあるというわけだ。

そのせいでもあるまいが、バブルとやらがはじけたそうで、店の売上げが落ち込んでしまった。

バブルがはじけて世の中が不景気になったのだそうが、その仕組がどうなっているのか、経済の知識の乏しい私は、風船が破れてどうして不景気になるのか、とんとわからない。

だが風船という語には、うわついて落ちつかない心の形容を表現している、とあるから、これだと、どうやらわかる気がする。

確かに売り上げがすごかった時期が、あるには、あった。過ぎてみれば、ああ、あれがバブルというしろものであったのかと、うなづけるのである。

おかげで、うちも、高級車を乗りまわし、ゴルフにうつつをぬかし、リゾートマンションを持つなどという、分不相応なことを、やらかし、まさに、うわついていたとしか、いいようがない。

今では、それらはみな、金に代わってしまい、店の運転資金にまわされてしまった。

かてて加えて、ディスカウンターの出現である。どこを、どうやって、そんな価格で商売が成り立つのか皆目見当がつかない。各メーカー、問屋に、説明を求めても、もぐもぐいうだけで、さっぱり合点がいかない。

まだある。“規制緩和”この破壊マシーンは、容赦なくわが家を踏み潰した。

さて、落ち込んだ売り上げをどうしようか。息子が、酒屋の立ち呑みを提案したのと、私が青木玉氏の随筆を読んだのは、ほとんど同時だった。

その文章の中に“もっきり”という単語が登場してくる“盛りっ切り”が語源であ

るらしい。酒屋のコップ酒、つまり立ち呑みの意となる。
母上の幸田文氏が酒やに縁づぎ、立ち呑みにかかわっていたことが書かれてあった。
これは面白い。私が嫁いできた頃は、立ち呑みが盛んだった。夕方には、仕事を終えたサラリーマンで店はいっぱいになった。道路にまであふれた客を山田の名入の印半纏を来た店の若い衆が捌いていた。
もう四十年も昔のことである。店をリニューアルした際に、立ち呑みは止めてしまっている。
私は、息子の発案にすぐさま賛同したのだが、ことはそう簡単にいかないのが世の常である。
この酒屋の店主は、なんでも反対人間なのである。以前に立ち呑みをやめてしまったのも、このことが原因であった。
そのいい種が変っている。人が入ってきてしまうというのだ。人が入ってきて困る商売なんてあるのかと、馬鹿馬鹿しい激論が続いた。息子は、いつもは引くが、この件に関しては引く気配をみせない。またまた二対一の対戦となる。嫁女は、音無しの構えである。
息子の行動は早い。もっきりの現場となる倉庫を片づけ始めた。金をかけずに手作りでやろうというわけだ。
年を重ね、その性急さに衰えを感じはじめたいえども、もともとその気は充分にある私である。息子を応援するにやぶさかではない。家中ぎくしゃくしながらも、ことは捗った。在庫品をカーテンでかくし、しまいこんであるカウンターテーブルを据えた。二階の倉庫から、埃をかぶった冷蔵庫を引っぱり出した。始めてみれば購入の必要はなくなんでもある。まさに、これまで宝の持ちぐされであった。グラスだって、使い切れないほどある。
人が入ってくるのが嫌いというご仁も、どうやら鳴りをひそめてきた。

かの随筆によると“もっきり”は塩か味噌を手にのせ、立ったままグィーッとやるか、チビチビやるかだが、今どき塩と味噌では、どうにも色けがない。
息子が築地でみつけてきた秋刀魚の一本干がある。これを針干しというのだそうだ。
針干しは当もっきりの売れ筋となった。ひと焙りさせた針干しのまるかじりは、酒、ビール、焼酎に共通して、よくあうのだそうだ。
酔漢を毛虫の如く嫌う私だが、幸いなことに当店のお抱えの一漢のみにて、他の酔漢は今のところ見ずにすんでいる。
その一漢は、もっきりの賑わいをじろりと睨んで、奥の事務机に、もっきり反対を腹の底に沈めたまま腰を据えている。
息子と私は、背中にチクチクと視線の痛みを感じながら、もっきりに精を出す。
棚の恵比寿、大黒様の埃を早く拭わなくちゃあいけないと、毎日思いながら、もっきりの繁栄を感謝している。

そして、もっきり

早めし、早○○芸のうちというが、そのどちらも駄目な方である。早めしに関していえば、どうしても違和感が我慢ならず、せっかく拵えた部分入れ歯が机の抽き出しにしまわれているという現状のために、片側の咀嚼のみに委ねられた食事は、早めしとは縁が遠のいてしまう。

もう一方は、便秘症のためということもあって、これらの芸については、その座を降りざるを得ない。見まわしたところ自慢出来るような、また、身を助けるような芸は持ち合わせていない。

芸とはほど遠いが、ピアノも弾くし、歌もうたう、特にコーラスは大好きである。スポーツは球技いろいろ、陸上競技は、砲丸投げにハイジャンプ、水泳は平泳ぎと、これでも学生時代には少しはならしたものだった。

その他手あたり次第にとりくみはしたが、老境に入ってからは、パタリと鳴りはおさまってしまった。これは年齢によるものだが、そのどれもがひどく中途はんぱで、代表に選ばれるなんていうしろものではなかった。ぬきんでているものがあれば続けられていたのかも知れない。

さて、倉庫改造もっきりが切って落されて数日がたった。

土地柄といおうか、お客様の質がよく、私を困らせるようなお客様はいなくてよかったと思っていた矢先のことである。

一見紳士風、人品骨柄卑しからぬ人物のご入来・・・。と思いきや、呑むほどに、人相は卑しく、話題は下品ときて、何よりまずいのが他のお客様に絡むのだ。こういう手合が一番困る。人品卑しき、これは如何ともし難いが、下品な話題と絡みに関しては、注意が可能である。

だが、いざという時に、何分にも腕っ節には自信がなく、一寸人よりは強そうな鼻柱だけが頼りの私である。少々間のぬけた声で私は

「あのう、他のお客様に迷惑なことは、おやめ下さい」

といったのだが、そんなことぐらいで、いうことをきくような相手ではない。全く無視という態である。ここはいま一番仕切り直しで、下腹に力を入れると、

「そんな話題、面白くもなんともない。自分の娘を猥談のネタにするなんて、とんでもない親父だ。うちの娘は、透け透けの黒いパンティーをはいているって、それがどうしたんです。ストリッパーがそういうのをはいてるって云った方が、まだ話になるでしょ、やめなさいっ」

と一気に声を荒げた。とたんに周囲はシーン。攻める呼吸に退く呼吸とばかり、こんどは優しい声で

「○○円でぇーす」

その客は、支払いをすますと、くるりと背をむけて出て行った。店の中のひとりが

「家では、奥さんや、娘さん達に相手にされていないんだ。あいつぁーきっと」

としめくくってくれた。私の持ち芸のひとつ、むかっ腹立ちの芸を、支援してくれるひとがいたというわけである。

もっきりウォッチング

その若者は
「もう少うし、ここにいていいですか」
と、そういって新しいたばこの封を切り、軽く上下に振った。中の一本が生きているかのようにせり上がってくる。
「ああ、いいですよ。どうぞ」
といったが、もう十二時をまわっている。
「電車まだあるの」
「大丈夫。大丈夫。終電は、ちゃんとインプットしてあります。ここ、落ち着くんだよなあ。殊に皆が帰ってしまって、一人になった時が」
ことばに煙がまじっていた。立ち呑みではあるが、高齢者用にと、シルバーシートを二脚用意してある。その一つに腰かけた若者は、建築会社の社員で、いま出張から戻ったところだといいながら十分ばかり前に店に入ってきたのである。
上司と一緒に度々訪れるこの若者は、当節にはめずらしく素直で、カウンターの内側からみている私の目にはさわやかに映る。
時折、口をとがらせて、不満げな表情をみせるが、実にうまく上司の意見を受け入れている。
更にいいのが彼の上司だ。社内でみせる顔と同じかどうかはわからないが、筋の通った話しぶりは、耳に心地よい。きき耳をたてているわけではないが、理不尽さは、みとめられない。諭すような話しぶりに“これでなくちゃあ”といつも思う。
どういう家庭人なのか、家族に対してもこの調子なのか確かめるすべはないが、男の優しさにあこがれ続けてウン十年、ここでの場面は、心なごむ一刻である。
「Mさん、さきほど帰られましたよ」
Mさんとはその上司のことだ。
「さっき、会社に立ち寄りましたらね。デスクの上に、メモがありましてね。『出張、ご苦労さん、先に帰りますが、報告書、よろしく頼む』ってあるんです。いつもそうです。必ずご苦労さんっていってくれます。」
彼は上司の優しさに充分に応えているようだ。これを“いちいちうるせえ”と感じる感性の悪いやつも結構多いだろうに・・・。
世の中、人間関係がぎすぎすしていて、たちまち犯罪にまで発展してしまう昨今、ちょっとした思いやりをという気持を皆が持てばいいと思うのだが、そうはいかぬというのが人の世である。

ついさっきまで、会社人間の上下関係とおぼしきグループがいたが、上と思われるご仁が、下と思えるご仁に何やらくどくど文句をたれていた。こんな場所で、いわなくてもいいのにと思うのだが、この上司どうやら酒ぐせが悪いのか、単なる不心得者なのかわからないが、部下なる者は、ビールグラスを片手にうなだれている。
あれでは、反感だけが残り、いい方向にはむかえまい。否定や禁止ばかりの教育は最早時代遅れではあるまいか。
一日の仕事を終え、いい気分で、おいしく呑んで、明日への活力とすればいいものをと老婆心ながら一こと申し上げたいが、私が横あいから口を出すわけにもゆかず、何とも歯がゆいことである。

ゆっくりと煙草をふかし、最後のビールを飲みほすと、
「遅くまで、すみませんでした。ほかの店だったらもう店を閉めますからっていわれちゃうんですけれど、おかみさんは親切なかたで、だから好きです」
“おや、おや、好きですか。はいはい、ありがとう”
私はただにこにことしてカウンターのこちら側に座っていた。
この商売の、こういうところが、私の楽しみのひとつなのである。

もっきりの御上（おかみ）

ショパンの別れの曲が葬儀場に流れていた。別れの曲がこういう使われ方をするのかと思いつつ献花をした。無宗教だそうで、香典の受取りもお断りとあった。
まさかショパンもお葬式用に使われようとは思ってもみなかったことだろう。
新しいお葬式のあり方として一考の余地はあると思う。
一般に別れは悲しいということになるが、決別がラッキーということもある。

縁切り詣でをするところは全国方々にある。いくつかを知っているが、今年の正月にテレビで放映されたのが京都のそれであった。
自力ではどうすることもできない事態、つまり寄り来たる悪縁を振り払うのに、私は占いに頼ったり、神社仏閣に手を合わせに行ったり・・・それしか思いつかない。とにかく頼りにしているのだ。中にはそれを笑いとばす友人もいるが、当人は大まじめで、下手な鉄砲も数打ちゃ当たるよ、とけっこう遠くまで出掛けていく。
テレビに映し出された神社は、京都の祇園近くにある金刀比羅大神さまである。金刀比羅さまは、海上安全の神様であることは知ってはいたが、それがどうして縁切りなのかわからない。そんなことは私にはどうでもいいのである。
そこは、祇園に近いために、舞妓さんがよくおまいりに行くということである。好かない男と縁を切りたい。好いたお方のほうと縁を結びたいと、一度に二つお願いをするらしい。だから縁切り専門というわけではないのである。
好奇心旺盛な友人がいる。“行く、行く”という。関西方面にくわしい彼女が一緒なら、方向音痴の私にとっては好都合でうれしい。痛む膝を引きづって厳寒の京都へ向った。
私には、切りたいと思う縁がいくつかあるが、今回の神詣では、その第一義と第二義は次の機会にまわすとして、第三義に絞った。
あれも、これもまとめてというのも何だか虫が好すぎて、神様にすまないような気がするものだから・・・。だが、どうも一つにまとまっているような気がしないでもない。
それは、“私が嫌だと思う縁よ、どうか私から離れてくれ”というものである。“近よってくれるな頼むよう”これを願おうというのである。
もっきりを始めて一年近くになった。初めの頃は、客筋も良く、結構楽しいことも多かった。仲良しになったお客様も多くある。時がたつにつれて、客層に広がりがでてきた。それはそれでうれしいことではあるのだが、私の最も嫌う酔客が現われ始めたのである。どうしてこうも酔漢とは仕末の悪いものなのか。
わが家にも虎が一頭いる。大分衰えはしたが私は永年この猛獣使いとして家業、家事、その他の傍ら気の休むひまもなかった。いや実際現在も休むひまがない。このことに加えて、店にも虎が出没してくるとなると、もう身がもたない。
虎は、一般に、口ばしることが支離滅裂でまともに拘り合っていたら、頭がおかしくなってくる。人にもよろうが、その日の店頭の虎は、下品なことをいうは、トイレはよごすは、悪ふざけをして酒はまき散らすは、行儀の悪さをみていて私はもうぶっちぎれ状態になった。さんざん呑んで、“そんなに呑んでないおかしい”とくる。
「私が、あんたら如き者からよけいに勘定を取ろうなんてけちなまねをするかっ。そ

んな少しばかりの金を値切ろうなんていうんなら一銭もいらないから帰った、帰った。」
私は声を荒げた。
「まけないんなら、もう来ないぞ」
「なにっ　うぬぼれなさんな。あんたなんか来てもらわない方がいいんだから、来てくださいなんて誰れがいうかっ」
「なにぃ」
「おいっ　こっちは楽しく呑んでんだ。うるせえんだよお前ら、おもてに出ろっ」
いいぞぉ、格好いい。私の親衛隊だ。彼らは、私をみよこさんと呼んでくれている。長身の彼は腕っぷしも強そうだ。イブニングシャドーも頼もしく映る。あとの二人も彼に続き、ズボンのベルトに手を入れて立っている。向こうは二人、こっちは三人、西部劇の酒場シーンさながらだ。
もっきりのおばさんは味方を得て、ますます持前の鼻柱が強くなる。だが気の弱さも持ち合わせているというやっかいなしろものなのである。
不快感がわあーっと広がって、憎悪感がふくらむ。ふくらませながら、さきほどのやりとりを反芻してみる。日頃のトレーニングのたまものか、あれだけの台詞がぽんぽんでる。あとは空手か柔道かといったところだ。いやいやもうすぐ七十歳になろうとしている。生兵法は怪我のもとだと友人がいっていたっけ。
おもてに出された二頭の虎は、悪態をつきながら、よたよたと去っていった。
この手の族(やから)よ、私の周辺に寄りつかないで。このためには神頼みしかないのである。これらを断ち切って、もっと良い縁をと、そこまでは欲張っていない。もっきりのおばさんのささやかなお願いである。
か弱い私なんていわないが、“なにぃっ”の大声は、私には似合わない。奴らに決別の歌と共に、縁切りのお礼をぶつけてやりたい心境である。
御利益のほどは、まだ先のこと、楽しみにしている。

タイトル　もっきり瞬景記

氏　　名　山田美与子

ペンネーム　山田三陽子

〒　１０１―００６３　東京都千代田区神田淡路町二―五―五

電話番号　０３―３２５３―６５３８

職　　業　酒販店自営

略　　歴　昭和十二年一月十八日生
横浜国立大学学芸学部
教職を経て酒販店に嫁す

原稿枚数　十枚